

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	30 / 2011 / 33-42
タイトル	やぶなべ関連冊子の復刻作業を終えて
著 者 名	石郷岡總一郎

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

やぶなべ関連冊子の復刻作業を終えて

第25代 石郷岡總一郎

一部の未了分は有るが、「やぶなべ会報(以降会報)」・「青高生物部部誌やぶなべ(以降部誌)」・「やぶなべ生態学」などのやぶなべ関連冊子(以下関連冊子)の復刻がほぼ終了した。この復刻の経緯や作業手順などをまとめ、その概要を記録として残す。

復刻の道のり

相当以前から、部誌などを未来に残すための方策が課題となっていた。その対策の一つの方法として合本が作られ、蛸名名誉会長宅ほかに保管されている。ただ、この方法では経年劣化を防ぐ事が困難であり、また、誰でもが利用できる状態にはなっていない。

ワープロ・パソコンが一般に普及してきた頃より、この原本劣化や散逸に対処するため、関連冊子のデジタルデータ化構想が発案されだしていた。ただ、往時は必要な機器や手段などの手当が付かず、延び延びにされていた。ごく一部については蛸名名誉会長が個人的にワープロで少しずつデータ化する作業をされていた様だ。

デジタルデータ化構想が本格化したのは、会報のデジタル化(PDF形式で収録したCD-Rでの配布)が始まった第17号(2005年4月号)がきっかけである。関連冊子をデジタルデータ化すれば、会報のCD-Rに収録して会員多数へ配布でき、劣化と散逸を防ぐ事が出来るだろうという発想である。こうして、途中若干の中断は有ったが、約7年(作業開始は2004年)に渡る長い復刻作業が開始された。

当初は、部誌よりも会報の復刻を優先する事になった。復刻の原本となるオリジナル冊子の入手性や作業のし易さを考慮したためである。また、復刻する数も部誌の約30冊に比べ、会報16冊と少なかった。この他に、広い世代に興味を持ってもらえるよう、なるべくランダムな収録にするという復刻方針が定められた。

最初は収録までの時間的都合により、復刻し易いものからの作業となった。それは、会報13~16号で、元々印刷所へデジタル編集・PDF入稿で印刷・製本を依頼したという経緯があった。会報13号は、初めてのデジタル編集版(冊子編集ソフトを使用し、これのみ2段組)である。会報14号は、手分けして入力したワープロ原稿を元に作成されたが、編集に不慣れな点があった。原稿サイズがA4版になっていて、印刷後B5版に切断・製本され、別刷りの表紙が付けられている。また、文字サイズなどの統一性に欠ける面もある。これらは、幸いな事に表紙を除く本体部分がデジタルデータで残されており、比較的度順調に復刻作業ができた。ただ、当時編集に使っていた一部ソフトが現在のパソコン環境で作動しないため、原本に手を加える事は出来ないものもある。

デジタル編集以前の会報(創刊号~12号)は、原本のスキヤナー取り込みを行って復刻作業を行った。スキヤナー画像を加工して閲覧し易くした「複写復刻版」、それをOCR処理(文字画像を文字データに変換する処理)して原本に近くなる様に再生した「再編集版」を作成した。

会報の復刻が終わった後、「グラフ青森」誌掲載の「やぶなべ生態学」の復刻に取り組んだ。これも会報12号までと同様の復刻作業であった。「やぶなべ生態学」は、見開き2頁の連載記事で有ったため、これを上・下二巻にまとめた。

「やぶなべ生態学」の復刻が一段落した頃、初代坂本氏が逝去された。蛸名名誉会長が坂本氏の

遺稿を見つけ、それをデジタル化して会報CD-Rに収録する事となった。「私の民俗学」・「庚申会修行法演義」がそれである。これは、複写復刻版のみの作成とした。

これら一連の復刻が終わった後、いよいよ長年の課題であった「部誌やぶなべ」の復刻に取りかかる事になった。2009年の事である。部誌はそれまでの復刻対象と異なり、「手書きが多い・経年劣化部分が多く見られる・印刷や製本の状態が悪いものもある」などの悪条件が見られた。そのため、文字のデジタルデータ化する作業(OCR処理など)が膨大になる事が分かり、「再編集版」の作成は見合わせる事になった。「複写復刻版」のみの作成で有ったが、会報30号を目処に作業を終わらせる予定となり、収録数が増え、時間的余裕はあまり無かった。

今回、復刻をひとまず終え、振り返って見ると小さなミスや不備があちこちに見受けられる。将来的に基本的な補正を行う可能性は否定しないが、原則的にこのままの状態になるだろう。原本の状態にもよるが、多少手を加えても目に見えて品質が向上する事は望めない。

なお、部誌に関しては、各記事を取捨選択した「再構成版」の作成構想も有るが、期間は未定である。

復刻完了に向けて

今回、会報30号を迎え、曲がりなりにも全巻の復刻が成ったが、以下の不備の解消を以て復刻完了となる。なお、次の①～③の処理が終わった時点で「統合版」が作成される予定で、④以降は補遺扱いとする。

① 部誌創刊号の再復刻

公開された部誌創刊号は、コピーで残されていた原本が元になっている。製本された状態でコピーが行われ、綴じ代部分の一部が欠けた状態になっている。記念すべき第1号でも有るため、オリジナル原本からの復刻を予定している。

② 部誌6号欠落部分の追加

復刻に使った原本に、2頁分(一枚の裏表)の不備が有り、部分的な復刻作業ができなかった。このため、CD-Rに収録した部誌6号には、欠損が有る。これも別な原本からの復刻を予定している。なお、①②とも原本の入手の目処は立っている。

③ 部誌17号の復刻

作業時間の都合により、会報30号へ収録した部誌17号は、簡易復刻となっている。後述する復刻作業を省略し、ファイルサイズも他の数倍以上と、イレギュラーな状態である。この部誌17号に関しては、作業時間の問題のみで有るので、適宜復刻は終える事ができる。なお、後の会報に正規の復刻版が収録されるが、簡易版と正規版を見比べて違いを見るのも面白いだろう。

④ 部誌20号欠落部分の探索

部誌20号には、9～16頁(野内川流域植物リストの一部)が欠けている。これは、発行時から元々あった欠落である。当時、「印刷・製本後に欠落に気づき、その部分を別刷りして部誌に挟んで配布した」という情報を得ている。復刻に使った原本では、その別刷り部分は散逸し入手できなかった。この部分は、やぶなべ会の会員の皆様に協力願ひ、該当部分をお持ちの方からお借り出来るかどうかで、復刻の可否が決まる。該当部分が見つかった時点で補完が行われるので、見直しは立っていない。

⑤ 部誌別冊の扱い

別冊扱いになっている部誌が3冊発行されている。「別冊1やぶなべ随筆集(1976年度)」、「別冊2やぶなべ随筆集(1978年度)」・「別冊3やぶなべ掲載記事目録(1982年)」である。これらについては、現在のところ、復刻の計画は無い。ただ、要望などが有れば、簡易復刻を行う場合も有る。

復刻作業

復刻作業の詳細について記録を残すと共に、今後同様な作業を試みる方へのヒントとする。

一般的な古文書であれば、オリジナル性を重視してスキャン画像自体で復刻版を作った方が良いだろう。しかし、やぶなべ関連冊子の場合、書かれた内容(研究や観察の記録)の重要性の方が高いと考える。そのため、原本のオリジナル性を尊重しつつ読みやすさを向上させる加工を取る事にした。また、生物の記録・研究重視という観点から、部誌別冊(随想集・目次録)の3冊は復刻の対象外とされた。

なお、長期の復刻作業であったため、作業手順や復刻方針などにブレがあり、処理方法の違いもすこしずつ有るため、最終の出来上がりに差がある。また、作業時の集中力の違いによっても仕上がりに差が出ている。

A. 基本的作業のおおまかな流れ

作業手順や設定などは、試行錯誤の連続であった。ここでは最終的な複写復刻版の処理手順を示すが、大まかな流れは初期から変わっていない。

① 原本のスキャナー取り込み

原本をスキャナーで1頁ずつ取り込んでいく。設定は、カラー表紙を除き、グレースケール・300～400dpiとした。可能であれば、取り込み時に若干コントラストを高める設定を行う。保存形式は、原則tiff形式またはpng形式とし、jpg形式は避けるようにした。jpg形式は、その特性から保存時の設定によって劣化が起こるためである。また、スキャンする頁面の後ろに黒紙を挟む事により、有る程度裏写りなどが防止できる。また、取り込みサイズを原本に即してB5判とした。

② 傾き補正

製本状態でのスキャンを行ったため、どうしても傾きが生じ、これを補正した。原本によっては、元々傾いて印刷されていたものも有った。

③ 下地(紙の部分)の白色化

スキャナー取り込みデータの状態では、紙の部分がグレーになっている場合が多い。明るさ・コントラスト、ヒストグラムなどを調整し、下地を白くする。

④ クリーニング・整形

白色化により下地のグレーは無くなるが、裏写りや裏抜け・文字のかすれや滲みなど由来の部分は解消されない。これらのゴミを一点一点消去や整形をしていく地道な作業を行う。

⑤ PDFファイル化

クリーニングが済んだ画像を新規保存し、PDF化する。有る程度(400倍程度)まで拡大表示させても支障がないよう300dpiで作成した。

⑥ PDFを一つにまとめ、しおりを付ける。

⑤で作成したPDFファイルは、1頁1ファイルとなっている。これらをまとめて1冊分の冊子状にする。その後、しおりを付けるなどの付帯作業を行い、完成する。

再編集版は、以下の手順で行った。

⑦ OCR処理

④で保存した画像に対してOCR処理を行い、テキストデータを得る。一般的に変換精度は90%程度しか無いため、誤変換部分を修正する。ゴミが残っていると、誤変換される場合も有る。

⑧ 図版の切り抜き

グラフ・図版・写真をスキャナー画像から切り抜き、調整後個別に保存する。なお、再編集版作成が前提の場合は、③④の処理の際、写真部分は別処理を行った。

⑨ 再編集

ワープロソフトを使い、⑦⑧で得られたデジタルデータを、原本に即した表現になるよう貼り付けていく。再編集版では、改行位置なども可能な限り原本に近づけるようにした。

⑩ PDF化

複写版と異なり、1冊分を一括してPDF化できる。しおりを付加するなどして完成する。

B. 復刻作業の詳細

まず、第一に何故複雑で煩雑な作業を行ったかの理由を述べる。それは、ファイルサイズの低減と可読性の向上を図る事で有った。

スキャンデータのままであれば、tiff形式で1冊当たり数百MB程にもなってしまう。このままPDF化しても極端なサイズ減少は出来ず、閲覧環境によっては支障が起こる。大きなサイズになる主な原因は、下地のグレー部分の量である。このグレー部分の有無によって、概ね1/20～30程度ファイルサイズを縮小できる事が確認された。複写復刻版のファイルサイズは、数MB～30MB程度で有るが、会報30号収録の部誌17号暫定版(簡易的なファイルサイズ減少処理済み)は100MBを超えている。これをもってグレー成分の有無がファイルサイズに影響を如何に及ぼすかが分かるだろう。

原本の状態によって、裏写り・インクの裏抜けが目立つものが有る。また、印刷が薄く、下地の影響で読みにくくなっているものも有る。これらの可読性を高める必要性も有った。下地を白くし、文字部分のコントラストを高め、余分なゴミを除去する事により、有る程度読み易くなったようだ。

① スキャン作業

スキャン作業は役員数人が手分けして行った。当初は適切なスキャン設定が分からず、必ずしも復刻に最適な画像を得られたわけではなかった。試行錯誤を繰り返した結果、上記の方法にたどり着いた。また、綴じた状態でのスキャンとなるため、先頭及び末尾の頁で密着性に問題が出る事も有った。これは、一回り小さい本などを当てて、加圧することで改善される事が分かった。

② 傾き補正

復刻版の一部は補正度合いが少なく、傾きが残ったままのものも交じっている。これは、傾き具合の確認方法を主に視認に頼っていたためである。途中から、ガイドラインを使うようになり精度は向上した。約0.3度を超えると、傾きを感じだすので、補正は0.1度単位で行った。ただ、スキャン時の影響か、あるいは原本自体の影響かは不明であるが、1頁の上下で傾き具合が異なる場合も

有った。それらは全体的に目立たなくなる程度までしか補正していない。また、一部は上下左右の位置を補正しているものもあるが、正確では無い。

③ 下地の白色化

まず、前処理として四方の余白部分と、本文内のまとまった空白部分の消去(範囲指定して削除)を行う。四方の余白には、紙以外にスキャン時に写り込んでしまう部分(部誌17号暫定版参照)も含まれるため、それらを一括で消してしまう。結果として本文部分のグレー成分の濃さが分かるようになり、どれくらいの強さの白色化処理を行えば良いかの目安ともなる。また、クリーニングの手間も一部省略できる。

次に「明るさ・コントラスト」の調整を行う。ほとんどの場合、「明るく(+）・高く(+)」する処理であるが、原本の状態によっては、「やや暗く(-)・高く(+)」した方が結果が良かった事も有った。この処理の設定値は、原則として1冊分は同じである。原本およびスキャンデータの状態に合わせて、1~2ページ試行して設定値を求めたが、各巻ごとの差はあまり無いようである。この操作は、1回ないし2回(データの状況による)行う。この操作の結果は、感動的である。瞬時に浅黒い紙面が色白に変わり、文字が浮かび上がって来る。

グレー成分を減らす「明るさ・コントラスト」調整を行うと、程度の差こそあれ同時に文字や図版部分も薄くなってしまう。これを濃くするために「ヒストグラム」調整を行った。これも状況に応じて1~2回行う。処理後は、よりグレー成分が少なくなり、「グレースケール」よりも「白黒」に近い状態になる。

ただ、原本の状態により、文字が元々薄い場合や線が細い場合、濃度の向上が図られないことが有った。その際は、ヒストグラム調整を行う前に「ソフトネス」効果を適用する。これは、ある種のぼかし効果が与えられ、文字の周りに僅かな滲みを作る。この状態でヒストグラム調整を行うと、線が太くなり文字がハッキリしてくる。

④ クリーニング・整形

③の処理は、両刃の刃の面が有る。通常では分からないくらいの小さな黒点(ゴミ)も文字と一緒に目立つように処理されてしまうからである。また、白色化処理では消去できない裏写り・裏抜けの一部もより目立った状態になってしまう。他に、スキャナーのガラス面に付着した「ゴミ」由来のものや、紙質由来(わらばん紙使用など)も有ったようだ。これらのゴミを「消しゴムツール」で一点一点消していく作業を行う。通常で数十箇所以上(多い場合は百箇所以上)は消したと思う。困難であったのは、訓読点とゴミの違いを見分ける事であった。活字印刷の場合は判別しやすいが、手書き文字の場合にどちらであるかが不明な箇所が有った。

一部では文字や図版の整形を行った場合も有った。インクの滲みがひどく判読しにくい部分や余りにも薄すぎて見えかかっている部分が対象である。余分な部分を消し、薄い部分を補記するなどした。また、ごく少ない例ではあるが、別の部分から文字をコピーして貼り付けた事も有った。ただし、これらは、原本などから内容を把握できる場合のみ処理を行い、正確に把握できない場合などは、整形処理を行っていない。そのため、複写復刻版にはかすれた文字なども散見されるだろう。また、明白な誤記も見つけたが、その訂正は行っていない。

②から初めて1頁分の作業時間は、15分~2時間程度であるが、大半は30分前後程度で有った。

③④-2 表紙

部誌などの一部は、表紙に色つきの紙が使われている。これらについては、経年変化とスキャン

時の平面性の問題により、質の面で問題をもつものが有った。それらについては、印刷された部分と下地を別々に処理し合成するようにした。印刷された部分は、グレースケールに変換し、本文部分と同様の処理を行う。

下地部分は、経年変化やスキャン時の浮き上がりなどの影響で、色が均一になっていない。そのため、原本に近い部分を切り抜き、全体が均一になるよう複写を繰り返して下地部分を作成した。この下地に、印刷部分を貼り付け、表紙を作成した。なお、裏表紙などの地色付の頁も同様に加工した。

細かな加工を施しているため、1頁当たりの作業時間は1時間前後で有った。

⑤⑥ PDFへの情報付加

一つにまとめたPDFファイルに、いくつかの付加情報を加えている。タイトル・発行情報・しおりなどである。一部の原本で、本文タイトルと目次タイトルが異なっていた事が有った。原則として「しおり」は本文タイトルとしているが、ごく一部は目次タイトルとなっている。なお、公開された関係冊子は、改編防止のためセキュリティ設定を行い、「印刷のみ許可」としている。

1冊分を仕上げる時間は、页数や原本の状態による加工のし易さにより異なり、5日～3週間程度で有った。

⑦⑧ 再編集版での変更点

前述の通り図や写真部分は、個別に切り抜いて画像処理を行った後に貼り付けた。写真部分は、網目印刷(新聞などで見られる網目の大きさを濃度を表す印刷方法)されており、そのままではフレアが発生する。そこで、穏やかなガウスボカシを掛けて網目をぼかし、フレア発生を抑えるようにした。そのため、やや不鮮明な画像になっている。

原本に「ルビ」や「強調点」が付加されているものも有ったが、編集に使ったソフトで再現困難だったため省略せざるを得なかった。

[参考] PDFファイルについて

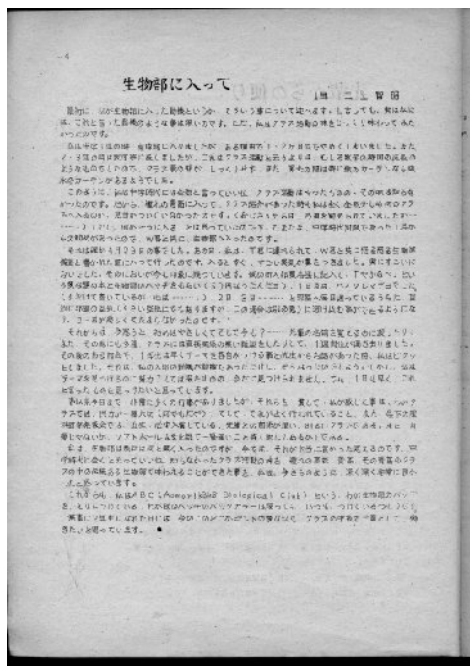
Portable Document Format (ポータブル・ドキュメント・フォーマット、略称 PDF) は、アドビシステムズが開発および提唱する、電子上の文書に関するファイルフォーマットである。特定の環境に左右されずに全ての環境でほぼ同様の状態で文章や画像等を閲覧できる特性を持っており、2008 年には国際標準化機構によって ISO 32000-1 として標準化された。(ウィキペディアより、一部省略)

あたかも紙に印刷されたような状態で閲覧でき、様々な閲覧環境でも体裁の変化はほとんど無い。改変を望まない公開文書では、現在のところ事実上標準のファイル形式となっている。

PDFファイルには、文字情報・画像情報・その他を含む事ができる。通常、文字情報部分はサイズが小さく、画像部分は大きくなる。そのため、「再編集復刻版」は小さく、「複写復刻版」は大きくなっている。また、文字情報部分は拡大してもきれいなままであるが、画像部分は拡大するとアラが目立つようになる。

また、PDFファイルに含まれる画像は、一般的にJPEG形式で収納されているため、元々の画像よりも画質が低下する傾向がある。

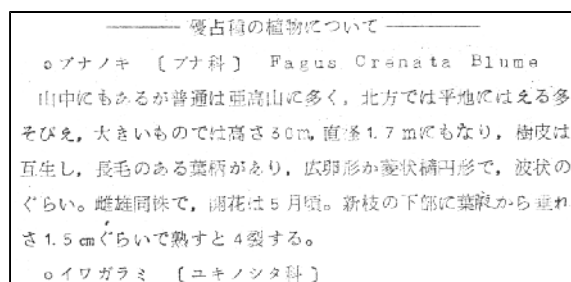
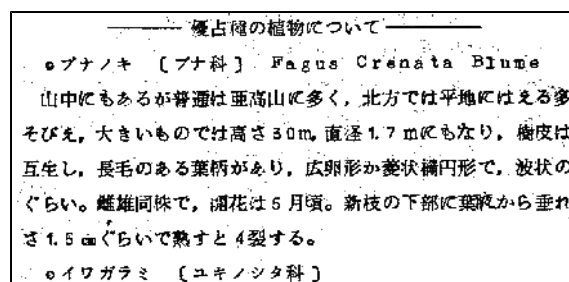
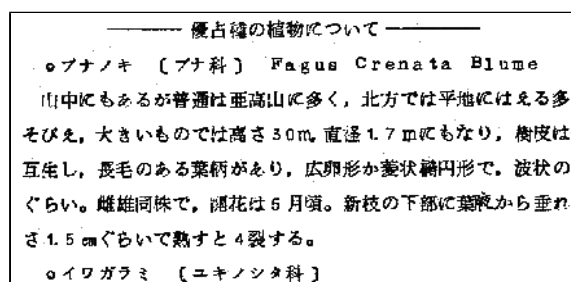
※ JPEG形式は、デジカメ画像などで広く使われている静止画像ファイル形式であるが、目立たない部分を省略する事(圧縮化)でファイルサイズを小さくしている。圧縮率によっては、大幅な画質の劣化が起こる。



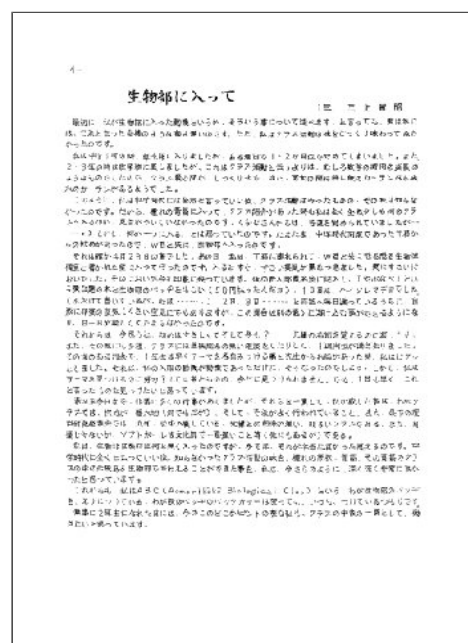
[図1] スキャンされた画像の例(裏写りも見られる)



[図2] まとまった余白部分を削除した例

[図3] 明るさ・コントラスト調整後の例(部分)
文字が薄く、やや細くなる
(注: 図1・2・6と図3・4・5は別巻)[図4] ヒストグラム調整後の例(部分)
文字以外にゴミも目立つようになってくる[図5] クリーニング後の例(部分)
ゴミが除去され、荒れた感じが緩和されている

※ この例では、図6の状態を1とすると、図1は約175倍、図2は約88倍のファイルサイズになっている。(図1と図2でも約2倍の差がある。)図3以降の処理では、ほとんどサイズの変化が無い。グレー成分の量が如何にファイルサイズに影響を及ぼしているか想像できるだろう。本誌収録の部誌17号暫定版と他のサイズを見比べても実感されるであろう。



[図6] 完成例

C. 個別の復刻対象冊子について

一部については先に触れたが、復刻対象となった冊子ごとの特徴などについて述べる。ただし、手分けしてスキャン作業を行ったため、直接原本を見ていない場合も有るので、スキャンデータを元とした記述になっている。

1. 会報創刊号～2号

手書き・孔版印刷。複写復刻版は、経年変化をそのまま見てもらうため、カラスキャンしたままの画像となっている。

なお、会報2号再編集版の「小動物展」記事は、蝦名名誉会長の要望により加筆訂正した内容となっていて、原本と異なる。なお、原本から再編集した内容を末尾に付属させた。

2. 会報3～12号

タイプ印刷。前述の方法を使って、複写復刻版を作成した。OCR処理が可能であったため、再編集版も作成された。

3. 会報13～16号

デジタル編集。主要部分はデジタルデータとして残されているため、基本的にそのままPDF化している。ただし、表紙部分は、別扱いだったため、原本を元に再構成を行っている。なお、14号再編集版は、残されていたデータの都合でA4判となっている。

4. やぶなべ生態学

オフセット印刷？。会報3～12号と同様の手法で復刻。1頁ごとの処理を行っているので、見開きにした場合、左右で若干のズレが残っている。また、再編集版はルビなどの点がオリジナルと異なっている。

5. 坂本氏遺稿

ワープロ印刷または手書きのコピー。複写版のみ。細かなクリーニング作業を省略した部分もある。

6. 部誌創刊号

手書き・孔版印刷。暫定版は、原本がコピーされたものより作成された。頁余白の関係で、綴じ代が影になって判別不能になっている部分が有る。原本入手後、再復刻を行う予定である。

7. 部誌2～8号

手書き・孔版印刷。必ずしも明示されていないが、文字の書き方・余白の取り方・印刷の濃度などから判断し、専門家の手によりガリ切り・印刷されたものと推定する。そのため、文字とゴミの区別はつきやすかった。

8. 部誌9～19号

タイプ印刷。途中から表紙が色つきとなっている。これもゴミの判別は容易であった。ただ、特殊な記号などのタイプ印刷で表現できない部分や図版などの一部に判別しにくい場所も有った。

9. 部誌20～21号

手書き・孔版印刷。おそらくリソグラフなどの製版機を利用したものと思われる。それぞれの筆者ごとに文字が異なるので、おのおのが手書きしたと思われる。部員による手作り感が強い。印刷濃度も部分により異なり、ゴミ判別が困難な場合も有った。

10. 部誌22号

和文タイプ・孔版印刷?。和文タイプを借り受け、部員が打ち込んだと聞いている1冊。比較的に復活作業は容易で有った。

11. 部誌23～29号

手書き・孔版印刷。これらも、おそらくリソグラフなどを利用したものと思われる。印刷濃度・文字の大きさや太さ・余白の使い方など相当乱れたものも含まれる。おそらく、鉛筆やボールペンなど様々な筆記具が使われたと想像され、それらの影響が印刷結果にも反映されているようだ。クリーニングなどが非常に困難なものも有った。文字の切り貼りは、主にこの中で行った。また、表題がハッキリしないものも有った。

12. 部誌30号

オフセット印刷?。現在のところ、「やぶなべ」最終巻である。復刻は比較的容易であった。

D. 機器やソフトについて

長期にわたる復刻作業のため、使用した機器やソフトは複数になった。

スキャナーは、手分けした各人が所有するもので、色々なメーカー・機種が交じっている。基本的に全てフラットベット型で、近年普及してきたドキュメントスキャナー型は入っていない。関係冊子を分解し、ドキュメントスキャナー型で取り込む方法をとった場合、これまで述べてきた手法以外での復刻になったかもしれない。ただ、ドキュメントスキャナー型が簡単に入手できるようになったのは、ここ2～3年の事でもあり、また、分解出来ない原本も存在するので、今回行った復刻の方向性に概ね間違いは無かったと思う。

加工に使ったパソコンも複数であった。基本的に後期になるほど性能が向上し、処理効率は上がっている。ただ、それぞれで使われたディスプレイの差が処理に影響を及ぼした事を記録しておく。ディスプレイの基本的性能差やその調整の影響で、「ゴミ」の見やすさが異なっていた。「A」で見た場合にほとんどゴミが見えない状態でも、「B」で見るとあちこちに残っているのが分かった事が有った。コントラストが高く、明るいディスプレイほど、小さな黒点(ゴミ)が目立たなくなる傾向が有るようだ。

画像処理ソフトは、主にペイントショッププロが使われた。ただし、バージョンは初期と最終では異なり、途中2～3回のバージョンアップが有った。画像処理ソフトは、色々なものが市販・フリーソフトとして流通しているが、「0.1度単位の傾き補正」・「明るさ・コントラストの同時補正」・「ヒストグラム調整」・「設定値の保持」・「やり直しの回数」などの有る程度高度な機能を持つものは限られ、これが無いと作業効率が低下する。

PDF作成・編集ソフトは、同時に複数使われた。主に画像からPDF化するためのソフト、しおりなどの加工をしたソフトもそれぞれ複数である。ライセンスの関係上、個別のパソコンで使えるソフトが異なっていたためである。ただ、最終仕上げは、「いきなりPDFシリーズ」を使う事が多かった。

「再編集版」の編集には、OpenOffice.orgが使われている。これも年代によってバージョンは異なる。このソフトは、マイクロソフトオフィス(ワード・エクセルなど)と同程度の機能を有するフリーのオフィスソフトであり、会報17号以降の会報はこのソフトで編集されている。ただし、現在は開発が止まっており、2011年からは枝分かれした「Libreoffice」に変更した。

統合版DVDについて

会報も部誌と同じ30号になり、これまで発行されたやぶなべ関連冊子を1枚にまとめた「統合版」を作成する事になっている。CD-Rには納まりきらない量となるため、DVD-Rに収録される。これがあれば全ての関連冊子を見る事ができる事になる。

「統合版」の作成に当たっては、先の通り「部誌創刊号・部誌6号・部誌17号」の不備解消が必要だが、以下の点にも手を加える予定である。

1. 一部部員名簿の復活

部誌の部員名簿部分は、「現住所と異なっている場合が多い」・「個人情報保護に抵触する恐れがある」ことから、公開されたPDFでは一部が削除されている。これを復活させる予定にした。

2. PDF表示の統一

長期に渡る作業により、PDFの初期表示に不統一がある。また、一部であるが、用紙サイズの不統一もある。これらの点や他の重要な不備が見つければ解消する予定である。なお、これらの差し替え版は、「統合版」にのみ収録し、会報CD-Rに再収録の予定は無い。

「統合版」は、実費程度の有償で、希望者へのみの配布になる予定である。詳しくは会報31号に掲載の予定で、多くの方からの要望が有ることを望んでいる。

最後になるが、復刻の作業を行い、やぶなべ関連冊子の全てに目を通したことになる。ただ、作業中は、文字のみ(若干の前後を含む)を見て、文章を読む事はほとんど無かった。ただ、部誌の随想などを見ると、「時代を超えて、高校生って同じ感性をもってるなあ」・「みんな健筆家だなあ」・「みんながんばってたなあ」という印象を持った。

やぶなべ関連冊子は、半世紀を超える記録である。誤謬も含んでいるであろうが、今では得られない記録も含んでいる。今後末永く貴重な記録として継承されていくことを望んでやまない。

予告 統合版 DVD-R 発行について(2)

今号でやぶなべ会報も通算30号となりました。これを一つの区切りとして、過去に発行された「やぶなべ会報」・「青森高校生物部部誌 やぶなべ」・その他のデジタル復刻版をまとめた「やぶなべ会報統合版 DVD-R」の作成を行います。希望者のみへの有償配布になる予定です。詳細は、次号の会報31号(2012年6月発行予定)でお知らせします。